

シゴト ファイル

ドローン測量士

松本 紘明さん(27)

テラドローン(東京都渋谷区)
技術部 技術・現場統括責任者



測量に使うドローンと松本紘明さん。ドローンはレーザーを載せて50~60mの高さまで揚げられます=どれもテラドローン提供

あゆみ

- 1992年、福島県広野町生まれ
- 小学校時代
「答えがはっきり出る」算数が好きだった。県大会で上位に入る強豪少年野球チームに所属
- 外遊びが大好きな中学校時代
平日は野球の練習、休みの日は山や川に行き、豊かな自然の中で遊んでいた。中学でも数学が得意科目
- 現場が楽しかった高専時代
自動車整備の学校も考えたが、父の母校でもあった福島高専(福島県いわき市)の土木関係の学科へ。測量の実習で「真っ白なところから一つずつ地図ができ上がっていくおもしろさ」を感じた。指導した測量士から「現場向き」と太鼓判を押される。「必要性を感じなくて」英語は大の苦手だった。3年生の3月、東日本大震災で県外に一時避難する
- 2012年4月
復興のために測量を本格的に学ぼうと、高専を中退して仙台工科専門学校測量学科(仙台市)へ
- 13年4月
福島に戻り、地元の建設会社に就職
- 17年7月
テラドローンに就職

ターニングポイント

展示会で声をかけ入社

最初の会社でドローンに出会い、驚きました。足で1週間かかる測量が、1時間の飛行です。操縦は楽しく、ドローンを使った仕事をもっとしたいと思いました。ドローンの展示会で今の会社を見つけ、「人を募集していませんか」と声をかけて、4カ月後に入社しました。

被災地や山林を測量 人の行けない場所へ

ドローンに載せたレーザーの反射で距離を測り、地形や距離を調べて地図や図面に落とし込みます。人が足を踏み入れにくい山林や被災地などで活躍する技術です。東日本大震災で被災した松本さんは「復興でどんな工事をしても、まず測量がないと手がつけられない。『縁の下』の力持ちの存在」と言います。

去年3月には、震災で土砂災害を受けたインドネシアのスラウェシ島で、現地の人と約千畝の土地を測量しました。

現場を歩いて障害物を確認し、ドローンの離着陸場所を数分決める。レーザーのたのめ地上の目印を設置。飛行経路を作り、スケジュールを考える。ドローンを飛ばして

測量してデータを集める。この間、2週間弱。現場が一つ終わったときの充実感はとても大きい」と松本さん。

飛行ギリギリまで入念なチェックは欠かせません。機器全体で数千万円というものもあります。「でも、飛ばしたら『行け!』くらいの感じで見えないところに行ってしまうので、あとは度胸で

す」。雨や風など天候に泣かされることもしばしばです。

学校では、三脚の上にカメラを載せたような機械を使う測量技術を学びました。「ドローンは一つのツール」と言います。精度では人が測るのに及びませんが、空中のレーザーからなら生い茂った葉の隙間を縫って計測できます。

昨年、西日本豪雨で被災を受けた電線の状況調べ、一昨年は西日本豪雨や北海道胆振東部地震の被災地域でも活躍しました。「災害のときは、見積りを作るよりも先に動いてしまっています」

土木工事現場で使う3D地図の作製も増えています。国

土木工事現場で使う3D地図の作製も増えています。国

土木省が進める建設現場のICT化の一つ。人出不足を補うために、ブルドローザなどの重機に地図データを読み込ませて自動運転します。

データを解析して地図にするのは別の部署の仕事ですが、すべての工程を理解するように努めています。「お客さんに安心感を持ってもらい、次の依頼につなげられます」

技術は次から次へと開発されます。今は水中の地形を測れるレーザーを試験中です。「新しい技術を『またきたか』ではなく、『どれをやるのか』と、楽しんでどんどん取り入れていきたいです」

(中田美和子)

①顧客ファースト

ニーズをくみとって、いいサービスを提供し、喜んでもらう

②仲間

この会社で働きたいと思われるようにみんな楽しく働く

③夢を見続ける

夢は「測量のいらない世界」。3Dの技術で、見られなかった景色をボタン一つで見られるようにしたい

シゴトの極意

これだけは! アイテム



iPadとスマートウォッチ。スマートウォッチ(写真中央)には、おいとめいの写真を入れて「日本人の全くない現場で癒されました」。

後輩へメッセージ

「正解」求めるより楽しいことを

「これをやれば正解」ではなく、「自分が何をやれば楽しいか」を考えて動くことです。学歴とか関係なく、夢を持って楽しいと思うことを全力でやっている、夢はかないます。